以上述べたる諸說を考量すれば、所謂回鶻文字が摩尼教徒の用ゐたるソグド文字より發達したるものなること疑ふべきに非るべし、然らば回鶻人が此の文字を使用するに至りし事情は如何、之更に次節に於て攷究せんとする所なり。

附。

ソグド文字が回鶻文字に先立ちて存在したるものなることは、前述の如く疑無き所なれども、然も之が果して何時より存したるものかにつきては、余の知れる限に於ては未だ論究したるものあらざるが如し、隋書經籍志（卷三十二）に「自後漢佛法行於中國、又得西域胡書、能以十四字、貫一切音、文省而義廣、謂之婆羅門書、與八體六文之義殊別、今取以附體勢之下」と見ゆ、Lacouperie[53] 氏は此の場合に於て、胡といふ語は Uigur を指したるものならんと考へ、其の十四なる字數も、亞剌比亞の史家 Ahmed ben Arabschah が、Uigur は十四の子音〔文字〕を有すと曰へるに合すれば、こゝに胡書といふものは回鶻文字を指せるものならんと說けり（尤も此の考は既に Rémusat[54] 氏の公にしたる所にして其の後の學者も之に反對せざりしが如し[55]）、されど此の如きは現今の學界に於ては多くの價値を有する考とは曰ふ可らず、若し十四なる胡書の字數を回鶻文字の字數に當つる事が正しとすれば、其の胡書といふものは回鶻字の前身なるソグド文字に該當せしめざる可らざること前に說きたる所によりて自ら明らかなるべし、ソグド地方、卽康國地方の僧侶が初期の支那佛教に關與せる點の多大なりしこと及び、西域胡書なる名稱も亦此の考を助成せしむる一條件たるを得べし。

玄奘三藏が大唐西域記に「自素葉水城、至羯霜那國、地名窣利、人亦謂焉、文字語言、卽隨稱矣、字源簡略、